たば

今年もやります、 伝えます!

島の魅力「女将さん」に迫る

けて作業を行うグループもある。

限引き出されるのか、中には夜通しか

の民宿の女将さんを取材し、ポスター 作成する活動を、今年も行うことに 義塾大学加藤文俊研究室を中心に、島 昨年の三宅島大学の開校以来、慶應

ク、モロミドの五つの民宿にそれぞれ シャンクラブNO. 3、アンバージャッ 日~二十五日)に新鼻荘、つくば、オー を行った。今回の滞在中(六月二十二 八件の旅館に取材をし、ポスター制作 同じく昨年十二月の滞在中に四件、計 にしており、昨年九月の滞在中に四件、 女将さんのポスターを作ることを目標 二、三人のグループに分かれて取材を 同研究室は、三宅島の民宿の全ての

外から来る私たちを笑顔で旅館に迎え 宅島の旅館の女将さんをインタビュー 田中優里は「このリサーチの間に、三 グループ最年少の環境情報学部二年の し、そしてポスターを作らせて頂く。 今回初めて三宅島を訪れたリサーチ

> の仕事への想い、島への想い、そして 女将さん自身の魅力に迫り、素敵なポ ん。インタビューを通して、彼女たち 入れてくれる島の顔でもある女将さ スターを作成したい。」と抱負を語っ

認識するというものである。 を考え、出来上がったポスターを通し 最大限に伝わる写真、キャッチコピー 間という短い時間の中で浮かび上がっ の女将さんのお話を伺い、およそ一時 民宿の宣伝ではなく、あくまで女将さ た女将さんの性格、ストーリーについ て考察したうえで、女将さんの魅力が んのポスターということである。民宿 重要なことは、ポスターと言っても 他者から見た女将さんの良さを再

決定作業も本当に時間をかけて行う。 なので、写真選び、キャッチコピーの きれないほど魅力的な女将さんばかり だが、毎回一枚のポスターでは表現し 三宅島でポスターを作るのは三回目

> 2012年 (平成 24年) ポスターという限られた枠組みの中 で、どうしたら女将さんの魅力が最大 22

> > 私は、不安でいっぱいだった。周りに

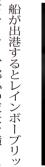
言われるがまま酔い止めを飲み、私は

験である。乗り物酔いすることの多い

船での旅は、私にとって初めての経

船に乗り込んだ。

たばん編集 発行所:加藤文俊研究室 info@ashitaban.net http://ashitaban.net/



将さん」に会いに、今日も島を巡る。 うか。島の大きな魅力の一つである「女

(長冨将成)

様々だ。今回はどんな女将さんに出会

え、どんなポスターが出来上がるだろ

人もいる。女将さんの数だけ反応は したポスターに驚く人もいれば、喜ぶ

ある。 らしいが、この揺れでさえ私は限界で ながら東京湾を進んでいく。波の少な の下をくぐり、都心の夜景を横目に見 い湾にいる間は、船はあまり揺れない 船が出港するとレインボーブリッジ

大川朝子

ペースで寝返りを打ったせいで起きて **じまったのだろう。もう一度寝ようと**



届けに行く予定だ。届けた時に、完成

その後取材先の民宿の女将さんに

御蔵会館にてプレゼンテーションを行

出来上がったポスターは印刷して、

間違いに気付くことになる。 いのだ。そう思っていた私は、 を飲み盛り上がってきたところで床に ついた。寝てしまえば揺れなど関係な 少しでも早く寝ようと思い、皆が洒 深夜三時ごろ、目が覚めた。狭いス すぐに

田中優里

6月23日は、新鼻荘へこの三人で伺います! 佐藤龍ノ介

> さっき起きたのも揺れのせいだったの だろう。不安と恐怖が私に降り掛かっ 目を瞑ると、激しい揺れが私を襲った。

瞑り、雑念を捨てる。どんなに船が揺 ぐに目を覚ましてしまう。そこで私は う。しかし、寝ようとしても揺れです 揺れと最後まで闘う覚悟を決めた。 このまま起きていては酔ってしま それからは我慢の時間である。目を

れたとしても、心までは揺れさせない。

不動の心だけが私の支えだ。

陸する。磯と山の混じった匂いを嗅ぐ ちと共に三宅での日々が始まりを迎え 安は隠しきれないが、晴れやかな気持 と、船での苦しみなど身体から逃げ出 荷物をまとめ、意気揚々と三宅島に上 していくようだった。帰りの船での不 に到着した。私は闘いに勝利したのだ。 た。船内にアナウンスが流れ、三宅島 そしてついに歓喜の瞬間がやってき



一宅島エッセイ

島びよ

ぽつんと生える草

河村裕次

初めての三宅島に心躍らせながら行きの船に乗る。実際は硬い二段ベッド た大きな揺れ。浅い睡眠に出鼻をくじかれた。島に着くと、体験したことのない大自然が。綺麗な青い海が大きなない大自然が。綺麗な青い海が大きなは大きな山。三宅島の大自然に圧倒され、眠気も吹っ飛ぶ。

宿舎に着き束の間の休息をとったあ 宿舎に着き束の間の休息をとったあ とは、バスで三十キロに及ぶ三宅一周 とは、バスで三十キロに及ぶ三宅一周 とは、バスで三十キロに及ぶ三宅一周 寝島の大きさを把握することができた。火山ガスの影響で錆びやすいという環境の中、キーキーと鳴りながら走るバスは三宅島らしさを醸し出す。島の各所に解説が記載された"ジオスポット"が設置されており、三宅島の各所に解説が記載された"ジオスの各所に解説が記載された"ジオスの各所に解説が記載された"ジオスのと、火山のこと、自然のこと、様々こと、火山のこと、自然のこと、様々

ぁ

かった。その中でも一九八三年に起きが、何と言っても火山の跡が凄まじが、何と言っても火山の跡が凄まじおい。自然の壮大さに他ならない。島には、自然の壮大さに他ならない。島には、自然の壮大さに他ならない。島に

た噴火の跡を目の当たりにした時にはた噴火の跡を目の当たりにした明された車の一部が残っていた。火山流の直撃を受けた阿古小学校跡には生々しい被害がそのままの状態で残っている。壊れた黒板やロッカー、割れた窓、そして固まった溶岩は建物の三階部分そして固まった溶岩は建物の三階部分そして固まった溶岩は建物の三階部分にまで及んでいた。噴火被害の現たといる。

を未の下には下草が生え渡っていた。 た木の下には下草が生え渡っていた。 大大な生命力が目の前にあった。火山 という自然の脅威と同時に、自然の力 という自然の脅威と同時に、自然の力 という自然の脅威と同時に、自然の力 という自然の脅威と同時に、自然の力 という自然の脅威と同時に、自然の力 というな厳しい環境下に住む住民の のような厳しい環境下に住む住民の のような厳しい環境下に住む住民の 方々には、それ相応の覚悟があること を悟った。この草木のような光り輝く



溶かさ素敵な強

船に乗って初めてきた三宅島は、波の激しい雨の日だった。三宅島と言えの激しい雨の日だった。三宅島と言えの大人一ジが強い。着いて私が真っ先に上を見上げると、山の頂上は雲に覆われており、島全体の荘厳な様をみたわれており、島全体の荘厳な様をみたような気がした。

写真のなかで見るだけだった三宅島は、一体どんな島だろう――考えるだけでもわくわくした。宿に着いてから一行はバスに乗り込み、三宅村役場の須永禎晃さんに島を案内して頂いた。 ないさんは島について沢山のことを教えて下さった。

も「ダイナミックで、島らしい」と言う。 からである。島の人たちは、火山噴火 とを含む島全体が「自然を受け入れ、 う感じたのだ。というのも、住む人び ともあるかもしれないが、とにかくそ れない、素敵な風景だ」と言う。そう から見える景色を「三宅島でしかみら 回復して行くところや、晴れた時に島 そして、溶岩の跡からどんどん自然が なに風が強くても、海が荒ぶっていて な資源として島をつくっている。どん で溶岩の影響を受けても、それを新た 自然と共に生きている」と感じられた 天気がその日荒れていたからというこ て、私は「ここは強い島だ」と思った。 須永さんに島を紹介して頂くに連れ

語る島の方のお話を聞いて、「ああ、この人たちは島と自然とともに生きているんだ」と感動を覚え、胸が熱くなった。島の人たちは、景色が良くても悪くても、風を感じ、自然を感じてそれを素敵だ、好きだと言うのだ。そういう姿を、私は素敵だと思った。集落やう姿を、私は素敵だと思った。集落やう姿を、私は素敵だと思った。集落やっなった。

相原瑛里

初めての

三宅島の風

中田茉夏

どんよりと分厚い雲に覆われた、風 の強い午前五時。ごつごつした奇妙な 形の黒い岩が、私たちを迎える。つい 形の黒い岩が、私たちを迎える。つい れた孤島での滞在への不安を越えて、 れた孤島での滞在への不安を越えて、 れた孤島での満なって来た。 がいていている。

三宅島の気候は全く読めない。青空 が見えたかと思うと、突然パラパラと が見えたかと思うと、突然パラパラと すさまじい勢いで吹いてくる。台風な すさまじい勢いで吹いてくる。台風な どかわいいものだ、と思ってしまうほ どの強風。知らぬ間に髪も顔もしょっ ばくなっていた。

バスに乗って、島を案内してもらう。

では、事前に知っていたつもりだった。 とれを乗り越えてきた土地であることれを乗り越えてきた土地であることに とれでも、実際に大量の溶岩石やかつ での学校の姿を目にすると、その迫力 での学校の姿を目にすると、その迫力 でいたで学ぶことの限界を感じた。字を読んで学ぶことの限界を感じた。字を読んで学ぶことの限界を感じた。 は、 事前に知っていた子どもたちの生活でた。 日阿古小中学校跡では、かつていた子どもたちの生活が容易に想像できてしまう。

タ食前に、海岸沿いをカメラと共に をの勢いが凄まじかった。今日はまだ、 きの勢いが凄まじかった。今日はまだ、 三宅島での生活のスタート地点に立っ ただけ。明日から、島の人々とのコミュ ただけ。明日から、島の人々とのコミュ ただけ。明日から、島の人々とのコミュ ただけ。明日から、島の人々とのコミュ にケーションがとれることが今はとて も楽しみだ。 五感を使って全身で、こ の島の空気を精一杯とりこみたい。感 の島の空気を精一杯とりこみたい。感